

# 北欧との文化的差異を考慮した 留学生受け入れプログラムの検討

— T-SAP グローバル教育インターンシップに焦点をあてて —

## Encountering Cultural Differences through T-SAP Internship Program: Findings and Future Indications

市川 桂

ICHIKAWA Katsura

都留文科大学では、平成30年度より複数の北欧の教員養成系大学から留学生を受け入れてグローバル教員養成プログラムを展開している。そのプログラムを構成する取り組みとして、全員を対象としたオリエンテーション・ワークショップと、希望者を対象としたインターンシップを開講し、日本の教育について学ぶ機会を設けている。本稿では、初回オリエンテーション・ワークショップを概観するとともに、インターンシップを受講した学生の省察レポートの分析を通じて、文化的差異を考慮して日本の教育についての基礎的な情報およびインターンシップに即した知識を提供することと、日本の多様な教育現場を体験できるインターンシップを開発していくことが重要であることを明らかにした。また、子どもたちと交流できる授業参加の機会をより増やしていくことなど、次年度以降の課題を示した。

キーワード：文化的差異、教員養成、インターンシップ、留学プログラム

### はじめに

都留文科大学文学部国際教育学科では、昨年度より北欧からの留学生を対象とした Tsuru Study Abroad Program (以下、T-SAP) を実施している。留学生は全員が協定校の教職課程に在籍している教員志望者であり、初年度では8月末から12月末までの期間に、デンマーク、スウェーデン、フィンランドの三か国から27名が参加した。二年目となる今年度は、33名が都留文科大学に学びに来ている。

T-SAP は、グローバルなものの方や考え方などを身に付けた教員を育成するという世界的潮流に即したプログラムである。日本においても、平成24年12月の中央教育審議会・教職課程の質の保証等に関するワーキンググループの中で、教員養成課程のグローバル化対応について議論が重ねられており、大学の教職課程の質の維持・向上を図りつつ、要件を満たせば学生が海外に留学した際に取得した単位を教職課程に係る単位として認めていく方針が示されている。グローバル教員の資質について研究する朝倉ら (2015, p.76) は、グローバル教員としての資質は、教師として、あるいは、人として本来重要な資質と

重なると結論付けている。それらは、①人や事象とかかわり、他者や異文化を受容し、尊重する、②新たな問題や目的に挑戦し、思考し、実行する、③自己を受容し、開示し、変容し、自立に向かう、の3点である。現代社会において教員を志す学生にとって、自国以外で教育現場を体験し、文化的差異を受け入れながら省察することが非常に重要になってきているのである。

そこで本稿では、初年度に留学生に対して実施したオリエンテーション・ワークショップを概観するとともに、Internship for Teaching and Education (以下、インターンシップ)の授業を通じて実際に日本の教育現場を体験した学生の省察レポートの質的分析をすることで、本取り組みがグローバル教員の育成につながったか、検討を行う。

## 1. オリエンテーション・ワークショップの概要

インターンシップを受講する学生はもちろんのこと、T-SAPの学生全員が教職課程に在籍する教員志望者であることから、留学生全員を対象に日本の教育について学ぶオリエンテーション・ワークショップを3度開催した。初回と2回目は大学でのグループワーク、3回目は英語と日本語で日本の学習指導要領に沿った授業を行っている相模原市にある私立のLCA国際小学校を訪問した。本稿では、初回のワークショップを概観する。

初回のワークショップでは、あらかじめ学生に渡しておいた2種類(1種類は全員共通、もうひとつは3種類の資料のうちランダムな1種類)のリーディング・アサインメントに基づいて学生をグループに分け、成果物としてポスターを作成させ、一人ひとりが責任をもって発表できるようにポスターツアーを実施した。ポスターツアーとは、ポスター<sup>1</sup>を作成することに加えて、ジグソー法<sup>2</sup>のようなグループの再編成を行い、ポスターの内容を共有するアクティブ・ラーニングの技法である(市川、2017、pp.31-33)。

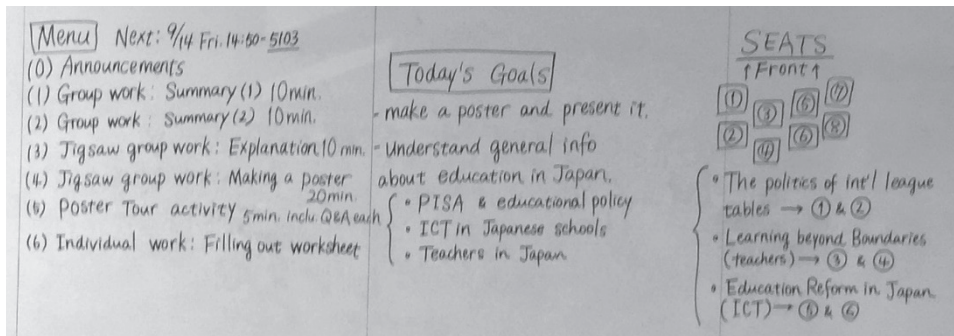


写真1 初回ワークショップの教室セッティング (ホワイトボード)

ワークショップでは、教員も学生も第二言語である英語を用いることから、座席指定や本時の目標、所要時間を含めた全体の流れ、次回の連絡などをホワイトボードに明記した。口頭で説明するとともに、消さずいつでも見られるようにしておくことで、スムーズに進行できるように配慮した。それぞれの席には、講義で用いるワークシートを置いておくとともに、パソコンを使用したい学生のために事前にワークシートをメール添付にて送付した。



写真2 初回ワークショップにおけるグループワークの様子

全員がディスカッションに参加しやすいように、3～5名でグループを構成した。多くの留学生は日本人よりも色素が薄いことから、まぶしさを感じないように教室の電気は付けないようにし、集中が途切れないように配慮を行った。机といすの配置などの教室のセッティングは事前に済ませておくことで、時間のロスを最小限にした。

まず、同一のリーディング・アサインメントを課せられた学生同士でグループを作り、それぞれが重要だと考えたところや疑問点をシェアさせ、その課題および全員共通の課題の理解を深めさせた。そして、3種類別々の課題を読んできた学生同士でグループ（ジグソーグループ）を組ませた。ジグソーグループでは、学生個人個人がエキスパートとして、担当した課題で得た情報や知識を他のメンバーと共有することが求められる。事前課題として学生一人に課す分量がさほど多くなくても、ワークショップを経て学生は相当量の知識を得ることができるのである。

全員がすべての課題（全学生共通1種類とランダム3種類の、合計4種類）について情報共有を行った時点で、教員に質問することができる時間を設けた。共通課題として読ませた日本の教育の歴史、ジグソー課題として用意したPISAと日本の教育についての報告書、日本の教員についての資料、教室でのICT活用についての資料、それぞれについて質疑応答を行った。事実確認の質問が多かったが、それはディスカッションをするための下準備であるという印象を受けた。事実、その後実施したポスター作成では、時にはグループの垣根を越えてポスターを描きながら学生同士でディスカッションする姿が見られた。

ジグソーグループごとに日本の教育について学んだこと、考えたことについて30分程度の時間を与えて模造紙と色ペンでポスターを作成させたが、巡視している間も教員と学生のディスカッションが盛んに行われた。この活動では、すべてのグループに対して同じ材料に基づいてポスターを作成させたが、完成したのを見ると、1枚として同じものはなかった。ディスカッションを通じてそれぞれのグループで焦点化を行い、比較の視点からポスターにまとめていたのである。



写真3 初回ワークショップにおけるポスターツアーの様子

既述のとおり、作成したポスターについて、学生1名（または2人組）が発表しなければならないことを強調して説明したことで、フリーライダー<sup>3</sup>を防ぐことができた。発表時は学生に番号を振り、その番号と同じポスターのところに集まることで、ツアーグループ（ポスター発表をお互いにし合うグループ）を編成した。自らが作成したポスターのところでは、責任を持って他のメンバーにその内容を発表し、質問に答えなければならない。全員が同水準の知識をもっていることから、質疑応答を含めて5分と短い時間でも、わかりやすくポイントを絞った発表ができていた。

グループごとに全体への発表を実施すると発表者の数は限られてしまうが、ポスターツアーにするとすべての学生に発表の機会を与えることができる。発表は小グループで実施するため、初対面に近い集団であっても学生のストレスになりにくいという利点もある。

- What do the people think of the public school system and all the testing?
- What about the social problems in Japan, high suicide rate, low birth rate and so on. Do schools do anything to change this?
- Aren't there any children with autism or ADHD? (Nikolaj)
- Why is the PISA test so important? Why not just teach "normally" instead of always focusing on tests?
- What is Japanese education like now? (All our tests are at least 6 years old)
- What does yutori-reform look like in Japanese schools?
- What happened to the use of technology in Japanese schools?
- How does the Japanese school look like and work in practice?
- Which philosophers here been part of the changes made in Japan?
- Which teaching methods are most commonly used in comparison to EU?
- How often do the teachers cooperate and observe classes? (Jonas)

図1 初回ワークショップのワークシートを通じて寄せられた学生からの質問（一部）



ワークシートは初回ワークショップの終了後に教員に提出させ、学生からの質問に答える形で2回目のワークショップを構成した。これは、講義の時間を最大限確保するために重要なことである。T-SAP 1期生の留学生はおしなべて積極的な学生が多く、質問で講義時間が短くなることが考えられたためである。寄せられた質問事項は多岐にわたったため、講義の内容に含めなかったものについては学生の名前をメモしておき、講義の導入部で答えるようにした。また、これらの質問については、他の授業においても活用できるように国際教育学科の教員と共有した。

質問内容を見てみると、教育制度や思想、あるいは実践の違い（歴史的変遷や他国と比較した際の違い）に基づく問いであることに気づくことができる。北欧諸国で一度は教育実習を経験してきている T-SAP の学生が、これまでの彼らの経験や知識に当てはまらない日本の教育について学ぶことは、グローバル教員に一步近づくことにつながると考えられる。

<p>Curriculum of Elementary Schools</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• The Course of Study</li> <li>• Subjects                             <ul style="list-style-type: none"> <li>• Japanese Language, Social Studies, Mathematics, Science, Life Skills, Music, Drawing and Handcraft, Home Economics, Physical Education, Moral Education, Special Activities and the Period of Integrated Study</li> </ul> </li> <li>• In 2002, teaching English during the Period of Integrated Study was approved</li> <li>• “Creation of special curricular-oriented schools”</li> </ul>	<p>In-service Training</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Teachers need to renew their credentials every 10 years                             <ul style="list-style-type: none"> <li>• Taking courses at universities during summer break</li> </ul> </li> <li>• In-school training sessions (Lesson Study)</li> <li>• Taking part in study groups on a voluntary basis and at his/ her own expenses</li> </ul>
<p>Discussions about Teachers</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Conducting club activities                             <ul style="list-style-type: none"> <li>• Working on weekends with very little extra payment</li> <li>• Coaching without experience</li> </ul> </li> <li>• Long working hours (7:30-20:00)</li> <li>• Short recess</li> <li>• Various tasks to do</li> </ul>	<p>Are teachers in Japan respected?</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Confucius thoughts and self devotion</li> <li>• Rote memorization or “force-feeding”</li> <li>• Teachers ⇌ people give students answers</li> </ul>
<p>Why so much discipline?</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Education in Japan aims to develop students’ collective characters</li> <li>• Individuality &lt;&lt; Collective existence</li> <li>• Set in certain forms, or “properness”–wearing school uniforms properly, following norms, etc.                             <ul style="list-style-type: none"> <li>• The notion of “outside reflects inside”</li> <li>• “The nail that sticks out will be hammered down.” (Japanese Proverb)</li> </ul> </li> </ul>	<p>Conclusion</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Education in Japan has formed in a distinctive way comparing to contiguous countries in Europe.</li> <li>• Education itself is a system to instill children a certain set of values.</li> <li>• Confucius value, especially harmony and order are still behind the merit system principles.                             <ul style="list-style-type: none"> <li>• Egalitarianism at schools, such as avoiding extraordinariness and valuing mediocrity</li> </ul> </li> </ul>

図2 ワークショップで使用した資料の一部

ワークショップの講義部分では、インターンシップで見学・体験することに関連した事項を中心に説明を行った。文化的差異が大きいため、学生の反応は「理解するのが難しい」、「自分たちの国とはまったく違う」といったものが大半であったが、実際に学校などに行く前にこうした種まきを行うことが省察につながると考えて実施した。また、必修科目である Japanese History and Culture (木下慎講師担当) において、日本についてさらに知識を深めさせるとともに、インターンシップ履修者の必修科目である Reflection and Assessment (山辺恵理子講師担当) においてより深い省察を行わせるなど、文化的に違う、で思考が終わらないようにプログラム全体を通して工夫をしている。

## 2. インターンシップ

### (1) インターンシップの概要

表1 2018年インターンシップの日程

日付	内容	実施場所
9月7日金曜日	接心体験、部活動見学・参加	私立富士学苑中高
9月15日土曜日	文化祭見学	都留市立都留第一中、都留第二中、東桂中
9月19日水曜日	就学前教育施設見学	月江寺幼稚園、森のようちえん
9月23日日曜日	運動会見学・参加	都留市立谷村第一小、東桂小
11月1日木曜日	都留市小中学校親善音楽会見学	うぐいすホール
10月17日水曜日、 24日水曜日、 11月14日水曜日	小学校授業見学・参加	都留市立都留文科大学附属小
11月14日水曜日、 21日水曜日	中学校授業見学・参加	私立富士学苑中
10月31日水曜日、 11月21日水曜日	高校授業見学・参加	私立富士学苑高

インターンシップでは、学校種や教育段階、教育内容などの多様性を重視して内容を選定し、事前に入念な打ち合わせを行った。就学前教育では、いわゆる従来型の教育を行っている幼稚園と、北欧の教育に近い実践を行っている施設の両方に行くことで比較検討ができるようにした。クラスサイズが小さい公立小学校で英語の授業に参加したり、私立高校のテスト対策の授業を見学したり、伝統的な行事である文化祭および運動会の見学・体験も実施した。特に、運動会については文化的差異の面で事前に講義が必要であると考え、東桂小学校白井校長（当時）および谷村第一小学校村上校長（当時）のご協力を得て、運動会を学校教育の中でどのように位置づけていらっしゃるか聞き取りを行い、インターンシップを受講している T-SAP の学生に対して説明するとともに、ラジオ体操や組体操の体験ワークショップを実施した。

### (2) インターンシップの省察についての分析方法

#### ①分析対象

グローバル教育インターンシップ授業履修者（17名）に課した省察レポート（就学前教育施設、小学校運動会、小学校授業、中学校文化祭、親善音楽祭、私立中学校授業、私



片付けるのではなく、複数の授業を通じて考えを深めさせることができた。また、下部の「relationship」は、「respect」と強い共起関係が見られた。教員と子どもの関係性について、自国（特にデンマーク）と比較して教員が尊敬される存在であることを分析していた。

図の右側にある「Buddhist」と「performance」、「stricter」のつながりは、従来型の幼児教育を行っている月江寺幼稚園において運動会の練習を見学したことに基づいている。就学前の子どもたちが教員の笛や号令に合わせて「軍隊のように」<sup>4</sup>規律を重視して仲間と一体となって動く光景が学生の印象に強く残ったと考えられる。北欧型の自由教育を実施している森のようちえんとの対比についても、多くの学生が触れている。

オリエンテーション・ワークショップでも扱った「discipline」（図の左上に位置）については、掃除の時間の体験をとおして考察を行っている学生が多かった。自国の教育現場にはない教育的活動を見学および体験することによって、この活動の重要性を既存の知識や理論と結びつけようとする姿勢が見られた。

「sports」および「festival」（sports festival、運動会という語で頻出）、「P.E.（Physical Education）」などが図中に現れているのは、インターンシップの実施時期が9月から11月の運動会および体育祭の時期であったことと、これらのイベントが子どもの協調・協力の姿勢および自主性、リーダーシップの育成などにおいて非常に重要な意味を持っていることについて講義で触れたからである。また、都留文科大学附属小学校において、日本語がほとんど話せない学生でも子どもたちと交流できる授業として、体育（P.E.）を公開してくださったことが大きく影響していると考えられる。

## おわりに

本稿で取り上げた日本の多様な教育現場を体験できるインターンシップの他に、多くの学生が日本の文化について体験を通じて学べるフィールドワーク<sup>5</sup>を履修していたが、こういった実習系の授業を単発で実施するのではなく、他の授業と有機的に結び付けている点がT-SAPの特長である。オリエンテーション・ワークショップにおいて、日本の教育について文化的差異を考慮した学びの場を提供し、インターンシップなどに即した知識を身に付けさせることのみならず、T-SAPの複数の授業を通じて学生の理解を深めさせることがグローバル教員の養成という観点で重要なのである。

T-SAPの初年度を振り返ってみると、この取り組みの副次的な効果として、インターンシップをはじめとする様々な授業でともに学んだ国際教育学科の学生が、国際的な比較の視点を持って日本の教育について考える機会を得られたということが挙げられる。また、現場の先生方からも、日本の教育の優れたところを改めて認識するきっかけになったと評価されている。T-SAPに関わることで、日本にいながらにして、グローバル教員としての資質が向上できるという側面もあるのではないだろうか。

将来、グローバルな教員人材となり得る学生の学びのためには、文化的差異がある教育現場で子どもたちと交流できる機会をより増やしていくことが求められる。そのためには、地域の学校との連携をより一層深め、綿密なコミュニケーションをとっていくことが肝要である。これからも、T-SAPをより魅力的なプログラムにするために、関係各所と力を合わせて改善を図っていきたい。



## 謝辞

T-SAP 初年度にご協力いただいた森のようちえんウブントゥ、月江寺幼稚園、LCA 国際小学校、都留市立都留文科大学附属小学校、谷村第一小学校、東桂小学校、都留第一中学校、都留第二中学校、東桂中学校、都留市教育委員会、富士学苑中学校、富士学苑高等学校のみなさまに感謝申し上げます。

## 注

- 1 ここで言うポスターとは、一枚の大きな模造紙に学習内容や解決した課題などを学生がまとめてわかりやすく表示したものを指す。
- 2 ジグソー法とは、グループ活動を支援するための方法から発展した、協調学習という学習方法に基づくアクティブ・ラーニングの技法を指す。
- 3 活動に参加しない学生のこと。
- 4 学生のレポートからの引用。
- 5 Japanese Culture Fieldwork I および II (木下慎講師、ノルドストロム・ヨハン講師担当) が該当。

## 引用文献

- 朝倉淳、小原友行、深澤清治、松浦武人、松宮奈賀子 (2015) 「グローバル教員に求められる資質に関する研究—海外での授業実践による自己変容を中心に」 広島大学大学院教育学研究科『広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト報告書』13巻、pp.71-76.
- 市川桂 (2017) 「第 2 章 アクティブ・ラーニングの技法」 栗田佳代子・日本教育研究イノベーションセンター編著『インタラクティブ・ティーチング—アクティブ・ラーニングを促す授業づくり—』河合出版、pp.31-40.
- 文部科学省 (2012) 「資料 1 教員養成課程のグローバル化対応に関する検討事項について」 2012年12月12日教職課程の質の保証等に関するワーキンググループ (第 4 回) 配付資料 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/093/093\\_1/shiryo/attach/1329286.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/093/093_1/shiryo/attach/1329286.htm) (2019/1/14 最終確認).

## 参考文献

- 樋口耕一 (2014) 「社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して」 ナカニシヤ出版.
- 樋口耕一 KH Coder. <http://khc.sourceforge.net> (2019/1/14 最終確認).

Received : September, 5, 2019

Accepted : November, 6, 2019

